



鷺幽霽先生撰

俳諧

狐乃茶袋

京都

湖月堂

和歌之有俳諧猶大雅典型外  
 有<sub>有</sub>腴記<sub>記</sub>稗官而俳諧中亦有俳  
 諧雖醜陋俗惡之事靡不取而  
 上<sub>上</sub>題愈出愈幻愈出愈奇乃所  
 謂<sub>謂</sub>一句立者<sub>立者</sub>是也頃者門下諸

子仿三都句戰之例設吟壇以  
募四方之句推余為俊成余曰  
有是哉醒世覺世亦不外此竟  
彙成一編題曰狐茶袋狐茶袋  
蓋野草之名也適有贈予此叫

者因假名此書此書急於上梓  
匆匆卒業多所遺脫則恐迎西  
行法師之怒也當姑候他日以  
出後編耳嗟乎世之俳書雖甚  
多使讀者不終篇而束諸高閣

何也其非拔菜故也予不敢刻  
舟求劍兵

丙子正月

鷺幽霧自叙



後水尾院行狀

清すゑきけなまがこゝし明社字  
干風や汐の干涸れして小舟



飛くくて舟や島乃ちつゝこゝ

鳳嶺のさきより山にすむ煙まき  
風雜乃たの河くれい舟それたう  
こねと巻着ふ表を

早蕨や清き又事ぬる妻う又  
葉の花や枝をけしる心せあり  
よる波の一枚泊りやうと水  
近にノ香  
成り架一  
妓  
奇川

息杖乃名に大匠なる枯雪京、  
 やりうふく月け約や晴角力、  
 水毛流き行やを梅遠柳、  
 院とれいさぶ柿夢うきりたさ、  
 踊場や鳥きく人へりあり、  
 世の中へ三かえぬまふ様つ那江戸、  
 下とるさなをさかり秋乃花、  
 花らりてかういさうかたの心こも、  
 白奥や汝鯨乃 幽霊う、  
 菴の雪菜屑けくも赤色成美、  
 蕪村、  
 几董、  
 定雅、  
 魁場、  
 甫尺、  
 暮太、  
 秋凡、  
 三平、  
 系傳、  
 成美

唐崎乃ねうけあし冬未立、  
 一人ゆた二人ゆき物夜き白、  
 菊の此や戸柳のまは秋乃月、  
 涼風やまにうさうしく情まら、  
 夕くわや寝て又吹秋の風、  
 十月の舟は雀乃日わの神、  
 約まや志るり、まありと夏れ中、  
 系とあき麻きく人へあふり、  
 紙き掛てさひひき秋の積う形、  
 きた日やねうさうし行勢、  
 白居易、  
 宋居、  
 孔阜、  
 樗良、  
 沙石、  
 青蘿、  
 里月、  
 卜龜、  
 士朗、  
 岳輅

新統乃嫁入るものしてついで  
 出づるもあつて起るる人なり帰るる  
 出づるもあつて起るる人なり帰るる  
 宿東乃りそ程ふ割の中我討ふ  
 素しゆやううしれ命又とと  
 下まゝとを教す家ももるれ花  
 つめはばと指にけりり葱乃水  
 松乃やね乃けりるも昔のつり  
 秋乃れははせもぬるのそり  
 本枯や草もついでと人念と吹

九州 九岳  
九州 曉甚  
九州 浮風  
九州 履寧  
 津房  
 乙二  
秋田 鐵船  
信州 五明  
甲斐 於叟  
 可於里

の力やのの井とる我とる女  
 開れとやつと梅又梅乃とる  
 涼しとやに振おとるなりほとる  
 秋の秋れもまよまけてる病とる  
 釣のほふ釣瓶とるわて喉の水  
 人言やとるの精とるのんこも  
 五斗文下にて水あり赤つと  
 其れ中ぬるきりりて梅咲  
 秋の秋や越乃とる山出る月  
 早はつとて也て田畑のつとる

九州 麦水  
 園更  
 菜窩  
 蒼虬  
 千代  
越中 鏡石  
 荒虫  
 宋豆  
 桑行  
 白雪

花もあまもとぬるふあはれ夏の月  
 大おぬや門もささちのりくの花  
 花もあまもとぬるふあはれ夏の月  
 秋もあまもとぬるふあはれ夏の月  
 春れ海既えんせつる鯨の那  
 志くれてもと保り松糸あまもとぬるふあはれ夏の月  
 いつれ世の人うらやみし志賀の雪  
 置白やちりしじくぬれ掃てまぐ  
 花あまもとぬるふあはれ夏の月  
 三為庵橋良宗魚海のものふやちりく  
 馬丈  
 暮之  
 王福  
 七松  
 壺仙  
 雲侶  
 塚城  
 真着  
 紫苑

鹿の題と山と谷は

鹿の題と山と谷は  
 橋良云君まがり秋跡と海より子仔鱗  
 甲何とらせん一ははのうらやちりく  
 三葉はふ

葉ののちや姫嶽と隈こり赤山  
 かたれちや海も桂とこすわ水  
 葉乃むの世界ふ々くも入りふ  
 右世よ三絶し保も予が妻兄王福が句に  
 葉ののちや姫嶽と隈こり赤山  
 王福

前二句の目前の意は、この句の終句の  
方には、さうして別段の奇詠あり

奥山や雪のれとちる物くれ 作者不知

白山や雪のれとちる物くれ 雄上

白山乃雪の下なる志くれ 圃更

白山や雪の下なる志くれ 眉山

右前三子乃句の大抵同一物眉と云う迄

佳絶なり雪は風と云うは更に妙

うん

天明戊申冬終失火

美しき長安一川の如く月 宋愚

晴望む園乃甲や月れ持 菜齋

けると難冊にちつてせられたる也

月盗む小使清や 句自り持 虎主

右予が蘇河先君渭陽宋愚翁先昨荒法史

乃句の訂ふ友人と情てその如と謗を予初と

私まはかして此書りや一句を勝句にして

西向處句も又缺へきよあつたゆふ一二夜

燈を新して其例を待す

附録



荒出大人園歌所體

正雅

正俗

國歌

あけりてきしめしうらりて  
幸しゆくかたきしめしうらりて  
花も咲くもおもしろく  
名月や海とみえりて  
百重や敷くしりて  
誰やうらたしめしうらりて  
梅うらたしめしうらりて  
是しめしうらたしめしうらりて  
うらりてしめしうらたしめしうらりて

正雅

俳諧

正俗

國歌

あけりてきしめしうらりて  
かたきしめしうらりて  
花も咲くもおもしろく  
名月や海とみえりて  
百重や敷くしりて  
誰やうらたしめしうらりて  
梅うらたしめしうらりて  
是しめしうらたしめしうらりて  
うらりてしめしうらたしめしうらりて

大名跡は片奇なり

并發句乃并

後古記云古事記日本紀あり十七言式ハ  
十九言乃うゝ瓜片款く出るなり古事集  
一併踏の部あり一和款の一體かり  
さねれ熟名と片うゝ一唱く一子中一  
是ハ正月神これいけん一神をせわうら  
つて一併踏と熟名とすうゝは越くあて  
さやうなりとて一うゝ一まかゝるよと  
よりとて併踏の邊なる改うゝた時勢  
かぬ一踏まが後も一たうまみらうら又

併發句とは并れと句をいふと十一言ハ  
一着と一發句二句ともをいふといふ  
と一きかきと一發句といふは一は一は  
句の始一すまは始く發句と一節一き  
まやと一なり

復名返りの事

かゝるはうゝふつゝ入門の始し童子れあ  
うに返ると又字を母字換換中と未  
と人乃く〇まゝとて則たの五十字文を  
と又字換と母字とて又換中と未と上繼

下横もろふたはアカアの返カイカの返  
 アキヤの返カモ皆横ぐイヤの返アマイの返イ  
 イクの返ウキウの返クモ皆とま<sup>ワド</sup>幾字防て返  
 しての皆は例えアウの返ナのゆ一余ハ準和  
 とき一初学切韻の次等文家小笠ふ  
 とくふ

初體甲令序

ア イ ウ エ オ  
 カ キ ク ケ コ

サ シ ス セ ソ  
 タ チ ツ テ ト  
 ナ ニ ヌ ノ  
 ハ ヒ フ ヘ ホ  
 マ ミ ム メ モ  
 ヤ ヤ ヲ ヨ  
 ラ リ ル レ ロ  
 ワ イ ウ エ オ

かまつらひのま  
 多く近世哲  
 の子にゆかり  
 祥から事ハ  
 きちにいつて  
 まう

中院公通御作花経一ある者ま

いそはけ世に置附と事くやりの  
あの人とら又野みらう人

ら乃人のませの猿ぢわがあま

け句長者とあまのつぎ乃

野にまゝあまのつぎ乃

まゝ

又野にらませの猿ぢわがあま

とけくは撰者又勝句いあげ

とけくは撰者又勝句いあげ

とけくは撰者又勝句いあげ

すうふすうわどあまぬれに

弁角乃りわてさうらうあま

ほつ貝とらう珠おとらうら

そわこまし大吹弁とげとらう

あまの野

海乃花のいさう入字うね

も瓜つらうあまのつぎ乃

内裏離人天を乃許字のま

と獲らうあまのつぎ乃

や方の春あまのつぎ乃

某公

玄白

作字元

山陰宗

とせ

隆志

雲報

小甲と雛乃奏者一掛ひたり ひす 隈水  
子し女や子のほろく梅さむり 乘捨

比獄の梅

ふる月ちりの鼻もらかり梅の花 し由

枯宇

へ上へ下へ下と下と下の梅と茶 茶所 白水

はむいりたつし影

は合結入いせぬ波

乃づる乃ゆとあいつふゆしきり 三村

附きいふを結よふまうらうき

さうがくいふふらうらうら

市助をいふらう三村をいひ

あうれさうれのおおぞの

けれいふのくは地いふらう名奏乃六者

りふれちかり提灯とさうれけりしちて

史をけしちりそのなうらうにせれあま

ありとあでぬらうらうらうらうら

くわがうた威どくうあま又きうらう六者

珠ねを所とPくははほその操赤は

威しんかうらう

性もあらん人阿は入はるん

しつゝもくぬ〜ひつぬひつ 羽州 大泉

雲報時代諸方秀白人のあるところ

三におよぶ〜と帝子乃準則と

雲のしつゝもくぬひつぬひつ

許しつゝもくぬひつぬひつ

あつゝもくぬひつぬひつ

かぢの下の下には〜ひつぬひつ

はらり〜ひつぬひつ

〇〇の曆ちり〜ひつぬひつ

〇〇のしつゝもくぬひつぬひつ

物まに〜ひつぬひつ

〇〇のしつゝもくぬひつぬひつ

雁のしつゝもくぬひつぬひつ

雲のしつゝもくぬひつぬひつ

柔谷と〜ひつぬひつ

いろりの中〜ひつぬひつ

すき焼そのとれた中に〜ひつぬひつ

ちり〜ひつぬひつ

千里り虎も時々の半れ供

めんごころのしるべの  
 のりおのりおのり  
 のりおのりおのり  
 のりおのりおのり  
 のりおのりおのり

○ 南をのりおのりおのり

謎四

宰相とぶらふたりとて虎乃泣ときり

一景碗

ほろろ書はひかくわくまじのしるべ

ころんとも海の世界をうらむ  
 — ころんと神の流しこ  
 — かのめきふ細がらん  
 — のりお梅乃わつどり

小倉附

月見がきき  
 きききききき  
 きききききき  
 きききききき  
 きききききき

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくま  
小樽月  
杜律堂

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくま

かきくまのうたのうたのうた



かきくまのうたのうたのうた

かきくまのうたのうたのうた

かきくま

かきくまのうたのうたのうた



七 了らふの田中十内上神は七の本ころア

**五**  
**門**  
**止**

も光極是の行のむがじのざりまん  
それう是れ否唯無定はアアアア

かぶつてん  
十の

しまがもじまうぞとあまのたよ

をまの

都いせんびいあまんざら

某

つら〜きあん〜つら〜

かつり

風流も流がかるねらうのやま

某

のり〜に〜

あう〜雨雨雨と雨にたり

あう〜雨  
雨にたり  
某

**日**

霜<sup>しも</sup>結<sup>むす</sup>きや〜のせん〜あづら

大<sup>おほ</sup>井<sup>い</sup>鹿<sup>か</sup>とこ〜のり〜

京都前白附

〜〜〜

丸<sup>まる</sup>菓<sup>が</sup>とよま〜のり〜葉<sup>は</sup>茶<sup>ちや</sup>草<sup>そう</sup>

あう〜〜一白立

はせ乃鹿や十丈ごりよの泡

玉砂掬<sup>く</sup>るりよるも〜る〜せ

十四

太師冠者つゝ一足で乗つて  
枳子賣喧嘩一歩してを振るげ  
まつやの仁王乃穴をほく。伝師  
源右衛門とがこんかどつさるる事  
くひまらうたどらうまらうまら  
と指いさぶらうたどらうまら  
居いさやうたどらうまら  
我處のやうも盤とらうまら

新形半天下

水はまらうの草いかにうらを

新形一夜門

誰のいよけそ乃十夜うめ

骨城夜打

又才っ類えなまらやけいせん

旧十書切

武花野や石二乃書のこけお

石橋者より物と類よ古人のむとて

けいさむじう有らう

近來喜でまらうたつる様乃如きれおん如おん

牛乃まらうたの如半が二軍こねがらふおん眠

食とまゝおぼろ人まゝの御戯  
若さふくくさめくお歌のはらみ  
はくしほしおんたやふふらま  
西しむすふらむらる都人の白  
世ふらふもあつらふらお城の句  
まのせく早よん  
まににせしめく  
傾城の酒で花入る花がら  
音で一遍くは者

ら中乃のたてし今れは  
山伏がせんくやけを  
お路の足袋がまき  
一っ巻く一っ雷  
まふ若やぐも小お  
浄るたうけら地した  
先陣の旗よ  
行乃よふつれ  
村あは皆  
らむい

ひらりと浮き上りて  
時経ぐらうとて抱きしめ  
酒樽よかりもいと暮ふ抱てくれ  
まのいもとらしむる人(おれ)  
人ともふめと浦田のぶいれ  
盗人のかぶせめくはひの  
氣くじに賭ぐ情く流るる  
小ゆこ入りに抱きしめあまのきこ  
人伸ぐ者くくして居らわらせ  
まん丸うたつて抱くせらりたり

十

古め器が彩のしつとふみきと  
瘦げしうらみしつとついで  
せんせしつとつとつとつとつと  
けしつとつとつとつとつとつと  
まじつとつとつとつとつとつと  
密鏡の影はうらみしつとつと  
化ゆきつとつとつとつとつと  
教匠者の門へ遠慮立て居る  
らつとつとつとつとつとつと  
雨どれの影はつとつとつと

十一

欄干に多るの雲とまきとて  
魚をう刺さる人らとて  
心ちひの振る海へ  
侍りこけし先か  
人もと百人のや  
つどらふ業流  
の蛇がそいで二階  
人きかサア漏て  
ゆきまふち入ら  
ぬきまふち入ら  
ぬきまふち入ら

めらる人々が  
舟の眠りが  
つらぬよも  
ゆんよと  
まらまら  
ふゆが  
すりこ  
川越  
雷が  
まつ

ひつとを人將一騎 夜がゆき  
りつづる 神用ふりし 妙なり  
なみりと 神の上にも されたる  
富実が ちりんと 接ふと せけり  
解いと けりて 吐か 吐か  
ざんぬりて 鯨鯨の 縄が きぬ  
~~~~~ セツ行と 備 かん  
丸腰で 蓄きの の 城 あり けり  
はよ馬 一 騎 あり とも あり  
ちりぬ の ぬりし づら とも あり

わひまを とも あり とも あり  
やこう あり 伝 あり あり けり  
公家 あり 社 あり あり あり  
衆人 あり あり あり あり あり  
うり あり あり あり あり あり  
伝 あり あり あり あり あり  
伝 あり あり あり あり あり  
す あり あり あり あり あり  
小 あり あり あり あり あり

人ちぞいづりたるはほむすまきり  
夕まきく六部がころりぬきり  
ぬらぬのく「一」眼をで居る  
ゆら「が」おまらぶぞやまきり  
り「一」場で舞よ「息」させたり  
白雉まが「百」葉もやうせよ  
つ「な」もほよゆらぬがゆらり  
舞にが合して後家鞘あまきり  
そゆよつれく「ま」がきとせ  
ぬらぬの「ま」一「舞」してゆ

舞「が」隣り舞きて  
お侍のねがゆらぬ舞居る  
ゆらぬま「ま」一「ま」ゆらり  
おまらぬ「ま」まきり  
り「ま」まきり  
舞「ま」まきり  
舞ら「ま」まきり  
お「ま」の舞がゆらぬ  
ゆらぬ「ま」まきり  
ゆらぬ「ま」まきり  
ゆらぬ「ま」まきり

らんぞうが時と掛してよるを  
らんぞうがやまらるまのぞう  
らんぞうが離とついでにせり  
らんぞうのやがゆるきくさる  
きれはれたるふ一日つづり  
真実がふよれ香とあそび  
おぼろげはあふくみ  
ゆきとあそぶる親がよみ  
いめんくしと機わがよき  
店えんくをいぬらげ  
三

かりぬうして我物とめでや  
顔堂と人魂があそび  
もろくの神うさ  
鳥行ふよまもろく  
人腹よ顔が未満よ  
けきと踊つては  
長公事げ  
金で葬れよ  
かなけふよら  
三



おはやくら戸まで着てさそく  
きくがわくお麻起り  
し一服がさるゑあして起てり  
久通しよ喧こらうて同て居る  
せましく念佛まをそつんでり  
同寺が専ら通して居り  
るのまの仕がくひくわたり  
人さすて居たりが述てり  
之聞がくのあるはあまのり  
まやんと答へくもすて居る

丁章がお口の邪すふあはる  
きりり〜ニなるはがすてり  
傾城が美しう〜るよ通るを  
初めがなす所ふめくつれり  
之聞がきくに并伝あられけ  
山伏がころんでさう下つてさ  
このころの笑が神ふあまのり  
日本と紙一すの〜やどつ  
とまゆり茶碗の音があひり  
人あふかく練もあそびたたり

あけきし傘れ漆よりふきし  
去杖がうらりの中ふあてある  
その葉く兔の声うきこえり  
ふりぶるといふんが縄くちて居  
とくくはびんいふ付ておられり  
帆くうらふ輝がうらしくさそり  
こもくときそたふふまて居る  
らん八とあふなるまむおひたり  
仏禮へ初もとくしてよりたき  
帆けりふ恨の打る泣がはる

かまよあふなぬのはらる泣があふ  
傘れ傘やむほくあしかり  
あつたのくもあつてあしかり  
たふれとほりて一編まらりたり  
海川と盗人のあしかりあつた  
盗人の穴くくをむりあつた  
奥市を鼻うたつとあしかり  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

ほくろふ按摩が鏡とくんで居  
る身入の棒ぶこ部十にめて居る  
ゆんごうがらやぐ部十にめて居る  
うんごうとちあふし身と捨て居る  
けこごもの部がくまへりゆり  
あまのうら月うごうで起てゆく  
あまのほのはが部をくぬく  
けこごうがは事をおくゆり  
うんごうがくまへりゆり  
うんごうがくまへりゆり  
うんごうがくまへりゆり

のうねはまふおひの尻がゆ  
ゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり  
ゆりのゆりゆりゆりゆり

湯乃山の海うら車かづきなり  
舞づううなるんが播よのたを  
ひびづうう管衆のりよよもわたり  
疵もおちんぞうけしうでとる  
今ぞんりわんぞうおきなり  
あゝくも物ぐさうとちんき  
うからく西島と實てあ  
とやれとぶらんとでいん  
ひんらと海ぐいあよのり  
園のうら公同をぐあ

あゝくはあうとあう  
さうのうとあうとあう  
のうとあうとあう  
がうとあうとあう  
追判がうとあう  
ゆらうあうとあう  
きうとあうとあう  
さうとあうとあう  
ひんらとあうとあう  
ゆらうあうとあう

ふもづぐ経あつたをよまびて  
まゝぬぐふびつてくし梅か  
こらつてと人あまのまを  
ふもづぐふもづぐのまを  
ふもづぐめてきつてふもづぐ  
ゆらゆらふもづぐふもづぐ  
鬼笑つてふもづぐ怒り  
鬼笑つてふもづぐ怒り  
鬼笑つてふもづぐ怒り  
鬼笑つてふもづぐ怒り

鬼笑つてふもづぐ怒り  
ふもづぐ大伴のふもづぐ  
をふもづぐ怒り  
ゆらゆらふもづぐふもづぐ  
次なるくふもづぐふもづぐ  
きつてふもづぐ怒り  
水もづぐふもづぐのふもづぐ  
ふもづぐふもづぐのふもづぐ  
穴もづぐふもづぐのふもづぐ  
休もづぐふもづぐのふもづぐ

うさねく〜ふね部を〜  
寄らなく思ふよきしく〜  
すまじくひし脊もくまら〜  
肉併く〜も〜を指で〜  
おめふひ〜  
窓透〜  
船店で教養程と書〜  
うら〜心車の跡〜  
喚〜

音〜開羽が聲〜  
樟〜く〜  
糸流〜  
けら〜  
鼓賣〜  
升〜  
や〜  
提灯〜  
ん中〜  
山〜



くまぐまぐとさうして百ふけさきざり  
念頭くまぐまぐとさうしてさうしてゆ  
る事入は膝ふ解て清くを  
川水くまぐまぐとさうしてさうして  
釣竿りふ青草市が浮く長  
舟清くとさうして真賣が床をかり  
雨そりふ笑くまぐまぐとさうしてさうして  
うらぐまぐとさうしてさうしてさうして  
風小風くまぐまぐとさうしてさうして  
うらぐまぐとさうしてさうしてさうして

金物の名がけは獲もくまぐまぐとさうして  
板り向く所は水の流氷くまぐまぐとさうして  
庭むくまぐまぐとさうしてさうしてさうして  
まんらんと取てお判とさうしてさうして  
た子包りおぼりかたお掛てさうして  
まね板くまぐまぐとさうしてさうしてさうして  
おぼりたうまぐまぐとさうしてさうしてさうして  
おぼりたうまぐまぐとさうしてさうしてさうして  
おぼりたうまぐまぐとさうしてさうしてさうして  
おぼりたうまぐまぐとさうしてさうしてさうして



鮭汁のれがやきよてえ舞がそ  
大鯛がやきのめふ煮らねたり  
おろしから魚汁を煮あせり  
五洲が風鈴入紙おろし  
のり梅干し一の挽ふし  
ひしこい 鱈舞い  
まやまがほ子ら  
らきうが清入前  
しらねが人  
まよがねの回

傘に打ちおひらき  
のりまがね  
まよがねの回  
しらねが人  
らきうが清入前  
まやまがほ子ら  
ひしこい 鱈舞い  
おろしから魚汁を煮あせり  
五洲が風鈴入紙おろし  
のり梅干し一の挽ふし  
大鯛がやきのめふ煮らねたり  
鮭汁のれがやきよてえ舞がそ

きん乃背中ふ野ゆひてゆ  
どんらんを視行乃をうまら  
ひりよに夜の結ゆさぐり  
終るよ白くらげがわらふ  
門岸くゆ人の枕あーく  
後医者づ百くころふも  
やぶらーくは根と堀て  
後入ーくも清きぶく  
ふち産の葉か解きく  
後医者づらてまらふく

後醫者乃の田乃の田乃の  
大なる年かしくよま  
わつまらふとわらふ  
とまらふとまらふ  
理やふね又がわく  
はいつかの奥へ  
後やが目くうり肥く  
すくこと子けが枕  
まらわらふとわらふ

五條てま乃白髪ぬりて  
栞とこししとたしくんぬり  
とこさつりひじ解とくまくと  
赤きが西丸のほくしおらわ  
らうらりと海よこくあそ  
り度くおまじかろう踏んじ  
きんがうおあうりて海と  
きんがう一息にひびき  
水はとわびひりてあま  
海西よ佛と中とたぐり

支那が出世乃かごうら  
やうおよ薬ばうら海と  
の療はらんをしまで  
らふよとあひくは  
舟楫はくあがきくひり  
古傘がひらきくは  
うらなまあひくうら  
着板とを字のほまが海  
けあ馬がまうくくあ  
うらあうけよあ海ねと

うらむききんへ能くしむくふか  
河津と珍がまてしんく  
つづく持つよにまわらぬく  
さつらふ孫乃月書かづり  
小坪と雛のあつこぢり  
まがやふたまうしん  
梅月づつるさつこゆ  
古五ふ睦がまてしん  
姉さのまはづつ  
みき

白紙うきふみ高ふめ  
人のさすい年あさ  
人のさすいのみ  
かんぞとほふ  
えんぞのさ  
月のさ  
町中と  
ん力う  
古五と  
るむ

まろりし味もみ果しきまろり  
酔ふらう屋とにふさつとら  
乃也とまろりしはちて角しかり  
ほちかみ林き力にせしれくわ  
ゆんごしと干しとらなよ暖むら  
大木の足舞と被用がまけり  
膝がカしとら 踵つら  
あしはむらにぬむらりのんでい  
らん伸と「息けしむらぬむら  
のいぬむらと汗むらふらむら

よらむらつらきとらぬむらむらむら  
雨とのの中しぬむらの使むらむら  
百年てぬらむらぬむらぬら  
ふんごでぬらむらぬらぬら  
まむらぬらぬらぬらぬらぬら  
ん含乃とん井馬がぬらぬら  
ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら  
小網市が将軍でぬらぬらぬら  
まゆんゆふぬらぬらぬらぬら  
被寫しぬらぬらぬらぬら



大端と天の空をうきまふ世  
まろりのくさくさけぐ尾と出つ  
相争とせく社をぐまきこたり

よまゝ母のよらゝまゝでち九ウえんせ  
あのをかりきつとくえんせ軍人塔  
今より團樂やとわんで吟哦するあ  
二三混してゝふまゝくた新風流餘韻と  
あそりせふ附記

吾那雪山千仞天外くくんと削りて  
海より噴層橋岡と現くく画  
幅其他馮浪山をどの潜勝故筆  
まろりのくさくさけぐ尾と出つ  
人智巧物絶真くく霊峰の氣と  
吐く異やうく

是 余雪嶽先せん  
万白くせ勝白集に入

まろりのくさくさけぐ尾と出つ  
けんえんよりけい色色乃色まろ  
看はくし今よりまろくくくじわり  
丹蝦 偷兒不知

けりち候と云先せとらふの余よ  
ついでと云先せとらふの余よ  
白く我々のに付て十下と云  
かみまのついでと云先せとらふの余よ  
そこの世のまはれと云先せとらふの余よ  
十下と云先せとらふの余よ  
と云先せとらふの余よ

そこの世のまはれと云先せとらふの余よ

息をでらうのついでと云先せとらふの余よ 標哉

けりち候と云先せとらふの余よ

うらやまのついでと云先せとらふの余よ  
自ら盡すのついでと云先せとらふの余よ  
けりち候と云先せとらふの余よ

比喩乃標

けりち候と云先せとらふの余よ 荒哉

真の真

火の中よと云先せとらふの余よ

廻文

おついでと云先せとらふの余よ 宗愚

冠附



入舟がつりつりしゆりり

此考ふ

はむろく人云北中一名公の所説也

美物一説

古佛の頭よりかゝりてなるなり

此考

曰

流るるりりてはみりて一なるなり

可也

是

うらぬぬがまけ洗でくまらり

連中

焼乃の美と稱がつりきけり

万考也

ゆけとそぢらぬの端ふねとゆかり

かりもぬるをねんかたがたまりたり

せんごにに邪すまの柳と流の流

いこのまふらむのゆきんが流すて

ひりくもぬんかたとんせとゆかり

ひりくもぬんかたふねが流すて

万考也

花流るる流の流とゆかり

此考

水ふらぬり人とゆかり

南を引は危ぶりてさしつゝきづる

曰

入里路中ゆりてやれつゝえまき

口平中とたつらるゝぐら

おれりやふぢくわつらつて

固とまゝにふるけとまき

月の中つゝ月がせ

名月と十二の月乃新くそ

新

懸え度

其氏

一突き

城端  
ノノ菴

一突き

今のがるゝ村多氏又く

八尾

山雲

孟乃壽終ふ次ナ乃終ぐ

多卓

噴菴

一ツはセツ入るはぬれ

城路

其水

お根乃志くれ月めあ

是の秀遠い百白よを勝る集も

稻邑

唐軍はあつり甲の門に

唐軍の

天物がくよつらわて

新

くくまうくまうくやうくまのれ 大内 水橋  
神通乃きまんぐさくく輝しなり  
まふまぬわくくで細くめたり

あるま同くま天物ハ一ぬらふしきり  
又一人ハ一せうま若くして舞い  
がひくくハ一せうま

のま

運あ乃みぐ天井ハまらたなり 奈具 又舟  
人のまふめく途馬まらけき  
阿中ハまきくくけくまらなり

光信の歌ハ一伝師が通ひくま 有破 連中  
やまのまふ石で佛をいつまけり  
あらくと又人まがえせかんご 福年 中  
あはれの帯うくまがひまらさ 和多 祐角  
炭壺ふら施乃増えやせやる  
えあげえやうく  
職年花生ふくくくありあつ 吉國府 のろ氏  
心であ乃信國とひく  
山溪乃二階ハ一雲とよてらふ そと 岱夫

紙疑雲霧屈猶有六朝僧

かんこもまふ山友以り傍あしん、屁主

○

野のほひさつらつらやうほふみん  
藁葉形

枝あふふらんけいふを引  
仙と云

三休息のふ 津川着れと  
山雲き

田つよよおのしきふるあつ行

どんどうまきりーを入るま柳  
名光

のぞくくあともる 柳子舞  
赤花を

蝶乃むけふるもあねおゆき  
赤花を

△

名物 連中

り地乃田方とさつてあつらつ  
中けよそ二つ釣瓶がゆたあつら  
なぶらつちを致もさけてはきさり  
ちりもこれらまかぶして通らつら  
若は家が義理とむすんでのんくら

△

侍ー地表むりうより屋う く菴  
すれ腹がゆくなり尻をたつら  
たつらつたつらつらつらつらつら

少人「白土のあつふおつこつしんきふあつこ  
とつこつしんきふおつこつしんきふあつこ  
佐つふ似て可なり又偶ふふよりそつこつしんき  
かつこつしんきふあつこつしんきふあつこ  
はつこつしんきふあつこつしんきふあつこ  
はつこつしんきふあつこつしんきふあつこ

つり流のたきをま重と傍ねふはより 山雲を

山雲よとちやうらふとすつこつしんき  
佛供田入とつこつしんきふあつこつしんき  
ノノ菴

火ふりとおふよりくく居るこ

室の枝折ては片が棟て居る 永徳寺

おみんちとつこつしんき 一ノノ菴

とつこつしんきふあつこつしんきふあつこ 山雲を

今つこつしんきふあつこつしんきふあつこ

田角かめが中れとひり 夕カラカ

は風しむらぶがぬを吹くれ 連中

いつぞいでこいでこいでいつぞら

糸あが留て臨りまけとつこつしんき

寄

あまふにくつらふ心もあけり  
わらまじんで懸入り目ざらふ  
盗人が枕つげし寝がらけり  
夕なごちあつふたりあふを  
とく  
金山  
唐忠  
依山

まよふもの場をひきしあつて  
折処

雪れ舟をふらふさび刀  
一三

△  
ゆく病うびきりこころ  
夜きり  
連中

胸の火とまけて金痛し  
長るふねりひ候とくれを  
夜あそびが舞うのこつたきり  
くつらふ心もあけり  
水伝しちあわこはしつてり  
かゆふしものひこちらてあ  
かひらかりまじでながれぬ  
まうでたまけぬこつて居る  
よふ夜でまじりまじりあつて  
跡枝の垣はうぶがめく居る

姉さるるしつとぞくも華とつちのさ

字折

凡の子がまれば幕はかこつけ

宵

取の轆ろりつふのぶひつてり

奥がふつやうやうよながう

うらやうがくしつと中と様ふら

まふもあつとまふとあられぬ

ちりちりグー小神ふ針とんまひ

十  
連中

ちり

ぢやくしもの返目ぐらんとおふき

ぢやくしもの兒女子の七板鹿美の戯なり

まろく入つたまごこそり

こ味海ふめく着いゝくねたり

こ味せんよなりてもひん入らざり

ととねがわい材布くもあか

今よりが袴あつてく度とけり

百城麻父先生と

あつていぐまのさうらまふあかんご

と十月がぬ院あつて夜がうら

さる阜村より菴点

ふんぐと退剝様〜

この派ふる牛の食之

牛引が口之乃馬〜

小野村 名指

わがまゝれ世〜

ナガ 神宗

ふくふ似〜

忠孝の花赤染も無風〜

金次

ちり〜

魯 終

△

二つとつ蹴〜

免は 輝

脊〜

人 翼

ち〜

某

清〜

客傷 大 俊

舌〜

岳 恩

さる後諸子望句

平〜

汪 由

く〜

る 丈

あ〜

芦 城



あつがくよのふりふり  
洋刺で金髪とらしと通ひたり  
あつがくと風の神とくふけり  
子馬が橋まうりやまきり  
らびびんののちいへ骨がまて  
うらぐらとくまてちぎりの  
ふんどのの光りしきやうが  
ぬくがぬきふりしきやう  
つらとちがまてちぎりの  
まうりやうりしきやう

暮三  
年人  
青巖  
雨龍  
城久  
七松  
玉保  
棠花  
依三

姉橋のわらわ姉とくふ通り  
も念が中後とく梅とく  
うと梅と光りしきやう  
白折子とく人馬とく  
青月上とくやちとく  
名美で祖又地獄とく  
念併とくあつがくと  
古五美とく細市とく  
あつがくとあつがくと  
あつがくとあつがくと

奥夫  
小る  
古龍  
和光  
長年  
青梧  
る年  
慈耳  
白雪  
桃里

純舟が流るる乃風を破換し 岱丈

るるの流るる舟と云

看極くしそきまの煙が光をかり 植夫

る所と云ふ乃折るが冷やなり 八松

そあはともでいらつておきけを 不石

よし女が癖の脊中と持てきこ 系虎全

望んてしそわて紙とあてり 杜若菴

流るるで位と志づしそわら 雪嶺

板の向りあてすまらばとせらま 垢崎氏女

あめらふ自傍乃あはれとてあ 一三亭

たぐひ火のれくし換をとまてげく 巳白

之様ふ木賃泊りとおきせり 屯仙

炭うまやまてとふふあがまてけり 東舎

乳のこもふ二度乃軍が起りけり 大旗

治事入るもろ六力も氷とけり 双石

かゝ陸の料理人工にこのてり 雪仲

浦ぬきが秋風しおし吹破る 味

破傘とかせらもろもてつり 奇鳥

張立乃釣常ととるさされと 内海

そらりの鯨が沖ふ活してとる 春推

くこやで且卯とひらつたやわ  
楚烏と猿とひらつたやわ  
山堂よも名やうの音が  
つらつら廊乃花の咲て居る  
幽室が銀交みて居る  
忠臣乃名がほれぬ  
神柳ふきよひのそりひ  
鬼婆が地獄乃名  
居乃雷きうのやで  
人水うせうさづり日がさつ

且寧 巴江 真葛 可也 純句 雪里 不猛 桂花 兔白 秋化

幽霊乃結が世阿ふか  
うんどうふと釣の夕之が  
流言が門うらそ  
よさざりの鞍枕が  
人海の鬼が  
みこが鹿乃  
所傳ふ国者が  
傾城がつつも  
はわい  
卯のあ

管眠 射雲 涿良 二川 草風 坂城 女 楚山 素月

野靡り換使入り膝とくろくを  
沖去るのうらつふに戸の風がき  
眼礼の末のうらつふに戸の風がき  
人魂が妻の肩とすのてゆく  
代士が抱とほぶのくはくはり  
本妻がぶらりこりこりこり  
似せやがうは危の傍よびをり  
くもりよははははははははははは  
娘おー一乳一ぢけ石をー  
よよよよよよよよよよよよよよ

白桃 蘿村 柳棟 白芨 野名 一東 里松 仙芝 浦柏 青柳

令わとあううほあてまらりを  
あはあああ見入り枝りはてき  
かんざと歌うはうはうはうは  
こりこりこりこりこりこりこり  
急きうはうはうはうはうは  
深ものよよと白粉のあははは  
大なるよきうはうはうはうは  
大なるが舞うく音うはうは  
年々うはうはうはうはうは  
大勢乃肩うはうはうはうは

花浪 奇丈 海色 鹽雨 魯雲 梅溪 姉川 蛤洋 芦荻 流蕨

四十一

夜珠  
 花餐  
 斗水  
 楚兮  
 昆草  
 双枝  
 五三  
 唯一  
 二昨  
 小松表

引白ハ名ノりも井のきりきり  
 五圃ガ舟ノふしきつげしり  
 大のよとひのきりてはしり  
 一ツあが園ノりけりしり  
 まつよとふハ坂のほがわらり  
 鶯のさけりけりしり  
 乃果を乃種うりけり  
 茶の泡と強し一ハのまきり  
 名月とばらし一薄く踏んご  
 中庭回でおまきりしり

鑑六  
 もろも  
 ふうさ  
 瑞穂  
 ろるよ  
 田子文  
 同才  
 冥途  
 木医  
 三庄

とうとう身に木挽が扇さつてさう  
 赤きよぐ流うしして納めてさう  
 ねまで花れあまうとのんでさう  
 入るよ楽えんとして叱らわさ  
 は君の虫提灯でなぶらけを  
 空つぎが同もくさわて吃さうり  
 舞うぐさぐ嫁にのぶらとさうてさう  
 ろまで杖が一二里あがりさう  
 弁をまつごごもつさうさう  
 脊戸にで楽えんとしてさうさう

柳番  
 大化  
 茂孫  
 けん  
 ひん又  
 花控  
 ぶく女  
 本下女  
 言内  
 袋持

發句進加

明月や観入之の花曇り  
 記匡く我の行もあまきれ  
 あれ様くささささうり月あ  
 梅う香や二百也さう音  
 油や乃雨よさうりて餅の市  
 そわ下う通澄乃さうさう  
 つこの花子の盛れさうりあ  
 子此のぬさうなさん世さうり

成雅  
 純句  
 石蘭  
 可也  
 免白  
 ち受  
 竊  
 女

本末を一物

ちりり入る目くらりりけ他物多  
 五門や大がら喰ひふ棒中間  
 杖のまや二王が眼怒りともひ  
 花しらまあけきよの娘うね  
 山もやうたの先祖りつそれ花  
 砂浜やうる花の中にもこれま  
 ま柳やうる花乃町の新しき  
 やまらうしや新の鳥さくみ乃くれ  
 宮りこまうしひく陰おれ鏡

一條  
 叫風  
 師古  
 白牟  
 射雲  
 草村  
 内海  
 矣哉  
 又良

櫻廂先生も衛公が癖ありていまど後  
 とう新書と喜む船来寺性と得りしは  
 蛾接乃骨もい捨つて異かうり常ふ  
 四方名寺と唱和自嬉む常て夢鬼の  
 七言歌行とはくり世に奇人せりり  
 園て自學幽壑と編てえさるるの  
 めきは真々し先ず園中の戯事花  
 謝と祝が棋のめしうあつらひお書と

六  
讀人統一在祝とて其棋人とせん  
御志とて其人とて同好とて  
其詩人の如きは他日世不出  
時々々々

受業 新保龍光謹識

六  
狼乃系袋二編 近刻

文化十三年丙子三月

京都東洞院佛光寺上町

御集丹摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛



